

仕事柄ひとりの時間が圧倒的に長い。人の目はなく、自らが自らを奮起させて一日は始まる。

一般に仕事と言えば、社会と通じ何らかの役に立つ生産性を持つものだろう。だが僕の場合、時代に目を向けてはいても、社会とのつながりを見越して描くわけではない。そんなどこか孤立した日々をやわらげられるものがある。

まずは大きな存在、自然だ。その恩恵は計りしれない。僕のバランスをとり、目を開かせてくれた。絵を生み出す源ともなる、ありがたい拠り所だった。それと音楽。毎日のようにギターやピアノを弾き歌ってきた。解放の時間、音の深呼吸。今ではたまに葉しむくらいだが、音楽はからだを洗ってくれる。

やわらぎは少し置いて絵のことを。25歳の時、腰を据えて作品をためようと東京から帰郷。4、5年のつもりがなぜかそのまま動かなかった。だが、地方にいくという感覚もこだわりもなく、無国籍の場所で描いてきたように思う。自らの空間に身を置き、貫いたと言えば聞こえはいいが、そ

れしかできなかつたのだ。絵は手ごわい。目の前には常に問題があり、気付くと年月が過ぎていた。しかし、何も成し得ていない気がするのだ。残りの時間があるとするればそれに託すしかない。

やわらぎ



昨年、大小合わせ大量のキャンバスを用意した。大きな固まりとしての制作

は、身体的に最後となるかもしれない。構えて自分課題した意気込みでもある。斯くして絵はモノとして残る。時間に耐え、どこかで生き続けるのか。それとも消えゆくものか。僕はつくり手、あとは見手にゆだねることなのだろう。

文章に限らず、そもそもエゴイストたる絵かき。世に照らせば与太者同然。周りは迷惑をこうむる。だが、この歳まで変わらなければ申し訳なくも仕方ない。なのに、うれし恥ずかしながら応援クラブまである。

人付き合いの悪い僕を遠巻きに支え、やわらぎを与えてくれる友人たちがいる。絵を見ようと足を運んでくださる人々がいる。暮らしの中に作品を取り入れ、生かすことを選んでもらった方々がいる。

そうやって、どこかしら目を向け触れ合っていた人たち。紙面で言つのもおかしいが、感謝を告げて終わる。

四季録。季節一巡り、この1年間思い付くままに書いてきた。その中で見えてきたものもあるし、浅学、幼稚な身の程を露呈するものにも。何が文章なるものに向かわせたのか。世の中どの齟齬からくる沈潜した鬱憤や、過ごした年月に刻

(吉田 淳治・画家)